



くも
蜘蛛の糸

あくたがわ
芥川

りゆうのすけ
龍之介



ある日の事でございます。※おしやかさま 御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮※の花は、みんな玉(玉石)のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊ずいから(花のおしべ・めしべ)は、何とも言えない好よい匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居おります。極楽は丁度朝ちようどなのでございませう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇おたたずみになって、水の面を蔽おもてっている蓮の葉の間から、ふと下の容ようす子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地※

※御釈迦様：仏教をひらき仏法を説いたインドの人。

※極楽：死んだあとに行くという素晴らしいところ。

※蓮：すいれん科の多年草。インド原産。極楽の世界は神聖な蓮の池だと、中国の仏教では、信じられていた。

獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途※さんずの河かわや針※の山の景色が、丁度のぞ覗めがねき眼鏡(のぞきからくり)を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多かんだたと言う男が一人、ほかの罪人と一しようごめに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と言う男は、人を殺したり家おおどろぼうに火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊おおどろぼうでございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路はばたを這はって行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小

※地獄：悪事をはたらいた者が、死んでここに落ち、責めを受けると
いう想像上の世界。

※三途の河：死後の世界へ行く途中に渡るといふ河。

※針の山：地獄にあつて針をうえてあるといふ山。

さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると言う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

御積おしやかさま迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御積迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のような白蓮しらばすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上っているものがあると思えますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものと言っては、ただ罪人がつく微かすかな嘆息たんそくばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦せめくに疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているでございましょう。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽むせびながら、まるで死にかかった蛙かわずのように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なくなにげ犍陀多かんだたが頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍うつて喜びました。この糸に縫すがりついて、どこまでものぼって行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違さむいませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましよう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はずはございません。

こう思いましたから犍陀多かんだたは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう言う事には昔から、慣れ切っているのです。ございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとう犍陀多うちもくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。そこで仕方がございせんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外ぞんがいわけがないかも知れません。犍陀多かんだたは両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、

数限かずかぎりもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻ありの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、しばらくはただ、莫迦ぼかのように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断きれそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断きれたと致きしましたら、折角せつかくここへまでのぼって来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落さかおとしに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう言う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這はい上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中うちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断きれて、落ちてしまふのに違いありません。

そこで犍陀多かんだたは大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰きに尋きいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断きれました。ですから犍陀多もたまりません。あつと言う間もなく風を切つて、独樂こまのようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちに立って、この一部始終いちぶしじゆうをじつと見ていらつしや
いましたが、やがて犍陀多かんだたが血の池の底へ石のように沈んでしまますと、悲し
そうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり
地獄からぬけ出そうとする、犍陀多かんだたの無慈悲むじひな心が、そうしてその心相あさま当な罰を
うけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間あさましく
思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着とんちやく致しません。その玉のよ
うな白い花は、御釈迦様の御足おみあしのまわりに、ゆらゆらうてな（花びらを囲む部分がく）を動かして、そのま

ん中にある金色の蕊ずいからは、何とも言えない好よい匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて
居おります。極楽ももう午ひるに近くなつたのでございましょう。

大正七年『赤い鳥』七月号（創刊号） 初出